

関東インカレ 部便り

目次

1. 講評

1.1 監督より

1.2 主将・女子主将より

2. 試合経過

3. 選手の言葉

4. 試合結果

5. 主務より

1. 講評

1.1 監督より

監督・藤田靖浩

13年ぶりの一部昇格に向けて意気込んで臨んだ今年度の関東インカレですが、男子はフィールド競技が大きく崩れ、総合得点37点の7位と昨年を下回りました。ここ2年間は昇格の可能性も高かっただけに、非常に悔しい結果となりました。

個々の選手をみると、10000メートル競歩で渡邊、200メートルで藤田が優勝。4×100メートルリレーは惜しくも表彰台に届かなかったものの40秒66の東大記録。棒高跳で三宅が4メートル70で5位と一年生としては久しぶりの入賞、女子も400メートルハードルで坪浦、800メートルで高石が準決勝に進むなど、良い成績を残した選手もいましたし、惜しくも入賞に届かなかったものの自己ベストを更新した選手も多

数でした。

ただ、全体を俯瞰すると、怪我などの影響もあったものの、2位で昇格した東京学芸大学も棄権者は多数いた模様であり、出場種目数、2番手、3番手の実力も上げていかないと昇格が難しいことを改めて実感した今回の関東インカレでした。

来年は4年生が抜けて戦力的にはかなり厳しくなりますが、今回200メートルで優勝の藤田も入学時は11秒半ばと、高校であまり実績のない選手でもしっかり練習を積めば結果を残せることも証明できましたので、部員一同しっかりと練習に励んでいきたいと思っています。

四日間、多数の方に応援に来ていただいたほか、多数の応援のメッセージも頂き大変ありがとうございました。

1.2 主将・女子主将より

主将・吉田侑弥

「二部優勝」という目標を掲げて、1年間この大会のために取り組んできました。しかしながら、結果としては総合7位。一部昇格にすら全く届かない結果に終わってしまいました。

無論、目標を達成するに足る実力をつけるに至らなかったというのも敗因の一つではあります。四日連続という過酷な日程の中、一人が複数種目で点を稼ぐ前提の戦いではこちらの分が悪いというのは事実です。ただそれ以上に、部員一人ひとりが関東インカレに向かって気持ちをひとつにできなかったこと、また結果に対して貪欲でなかった、慢心があったことが、昨今で最高レベルの選手を擁しながら昨年にも及ばぬ結果になってしまった大きな理由であると考えます。

この結果を正直に受け止め、今一度対校戦というものへの捉え方や部員としての心構えといったものを考え直すことが、今後部が結果を残していくために必要不可欠であると考えています。敗戦から得られる沢山の教訓をこれからの対校戦、また来年以降の部に可能な限り活かすため、部員一同これからの練習に取り組む所存です。

最後になりましたが、お忙しい中競技場までお越しになった先輩方を始め、OB・OGの皆様から多大なるご支援をいただいておりますことを、部員一同心より感謝しております。七大戦や京大戦におきましては必ずよいご報告をさせていただきますので、今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。

女子主将・白形優依

今回の関東インカレには女子パートから400Hに坪浦(3),800mに高石(2)が出場しました。坪浦は5月に標準を突破した後練習で着々と調子を上げ、予選ではUBを1秒以上上回るタイムで準決勝進出を決めました。高石は予選の1週目で全国レベルの選手たちより前に出る果敢な走りを見せ、PB および自身の持つ東大記録を更新して準決勝進出を決めました。両名とも初出場ながら物怖じしない走りで予選・準決勝を走り、1部昇格を目指す部全体に良い流れを与えたばかりでなく、全カレ標準まであと僅かのタイムを叩き出しました。どちらも今年のカレ出場へ向けて意気込んでいます。

今年の新入生には自己ベストが関カレ標準に肉薄している選手が複数おり、来年は関東インカレで活躍する女子部員を更に多くご覧いただけたらと思っております。

今年のカレパートは中長距離女子の自己ベストラッシュに始まり、坪浦・高石の関カレでの活躍と非常にいい流れでシーズンインしています。チームとしては、次の大きな対校戦は七大戦だと考えています。人数は少ないものの、関カレに出場した2名を始めとして、戦力的には他校に劣らず優勝を狙っていきたく思っています。目標達成のために女子一同全力を尽くしますので、今後ともご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

2. 試合経過

◎トラック種目

5/19(木)

11:15 男子3部100m 決勝

男子3部の100m決勝には、東大から竹井(D1)が出場。第7レーンでのスタートとなった。上位入賞を狙い、スターティングブロックに足をかける。

ピストルが鳴り一斉にスタート。スタートダッシュも決まり快走を見せ、他選手に食らいつく。接戦となったが、結果は惜しくも6位。表彰台には届かなかった。

残念ながら今回は応援席の期待に応えることはできなかったが、今後もその走りでチームを支え続けてもらいたい。

11:20 男子100m 予選

予選二組目には稲葉(5年)が出場。試合は一日目の11時30分頃に行われ、気温も高くよく晴れた天候であった。

東大の先陣を切って登場。ゴール付近からチームの応援を受け、足合わせを行う。稲葉は第3レーンでのスタートだ。

号砲が鳴る。向かい風が吹く中一斉にスタート。加速区間にて全員が横並びになるが、次第に差が開く。常に部員のお手本とされてきた稲葉の走りであったが上位3位に食い込むことはならず、向かい風0.9mの中10"98で6位。決勝へ進むことは叶わなかった。

予選第三組には藤田(旭)(5年)が出場。ゴール付近スタンドの応援を受け、第8レーンに立ちレースに備える。壮行会にて3冠を獲ると抱負を述べ、我が部のエースとして優勝が期待される藤田はこの日も力強い走りを展開する。

ピストルの音が鳴るとともにスタート。スタートで一瞬詰まったかのように思われたが一気に加速、その不安をはねのける。圧倒的なトップスピード、余裕の走りで他を制し、1着でゴールした。向かい風1.0mで10"80のタイムをたたき出し、準決勝へと駒を進め

た。

予選第四組には泉(5年)が出場。4×100m リレーでも一走を務めるなど圧倒的なスタートダッシュを誇る泉。準決勝進出を期待され、第2レーンでスタート。藤田の準決勝進出の勢いに乗りたいたいところだ。

号砲がなり一斉にスタート。レース序盤で他走者を引き離す。このまま前半の勢いでゴールしたいところであったが、他大学の選手による猛烈な追い上げを受けゴールは4着、向かい風1.2mのなか11"05のタイム。あと一步というところで惜しくも準決勝進出とはならなかった。

14:05 男子 400m 予選

3組2レーンに森本(4年)の出場。4年目にして初の個人での出場となる。申請記録では上位ではないため厳しい戦いではあるが、一ヶ月前に六大戦で入賞しているという実績もあり、また400mの試合経験も豊富である。ゴールデンウィークに標準を切った勢いそのままに積極的な試合運びを見せれば、上のラウンドへの進出も期待される。

晴天の中、号砲が鳴りスタート。いつもと同じように前半はあまりスピードを出しすぎずに落ち着いた走りを見せる。これが森本の走りの型であるため誰も慌てることはない。しかしやはり関カレというべきか、普段よりも前との差が開いていくのが早い。そのまま少し前と差を広げられたところで200mを通過した。ここからが森本の本領発揮である。ギアを一つ、いや二つ上げ前を走る選手を猛然と追い上げる。300m付近で外側の一人を抜きラストの直線に入る。徐々に前との差を詰め最後の最後まで懸命に追いかける、が一步及ばずそのままゴールイン。結果は49"88で組6着であった。

結果としては、タイムはベストではなく予選落ちということになってしまった。しかし大勢の短距離部員をまとめ上げてきた短距離チーフが最後の最後に標準を切り、関カレで戦ったことは短距離パートに確実に良い影響をもたらした。今回の悔しさをバネにこれ

以降の対校戦において森本自身も勝利を、また短距離としても勝利していくことを期待していただきたい。

15:55 男子 4×100mR 予選

予選は泉(5年)-西村(4年)-松本(4年)-藤田(旭)(5年)の走順で出場。ついに来た関東インカレの舞台。去年の悔しさを、是非39秒台の東大記録の優勝で晴らしてほしい。まずは予選を危なげなく組1着で通って欲しいところ。

予選は2,3走間のバトンがつまり、3,4走もバトンが一度で渡らないというアクシデントがあったが、組1着の40"76で決勝進出。

16:50 男子 10000m 決勝

近藤(2年)の出場。ひと月前に左足首を痛めて以降、左脚全体としてのバランスが極端に悪くなり、関カレの2週間前から1週間前にかけて全く走らないなど、レースに向けた調整にかなり苦戦を強いられていた。その状態も考慮し、3000までは後方で待機し中盤から他の選手を拾っていき、ラストで一気に入賞ラインに入り込む予定であった。

スタート直後、転倒に巻き込まれるも上手く乗り切って最後尾につける。先頭の1000m通過は2'51、対する近藤は2'55。かなり縦長の集団となっていたが、2600mまでに3つの集団に分かれた。近藤は3000を8'40で通過。想定通りの安全なペースでレースを進め、中盤以降で順位を上げていく体勢を整える。

ここから近藤は國學院の選手に付きながらペースの落ちてきた選手を拾うことを繰り返すが、序盤にできてしまった上位選手たちとのかなりの差は詰まらない。崩れて落ちてくる選手はいるものの、一定数いる先頭集団のペースは安定していた。近藤の5000m通過は14'38。先頭とは21秒差。

それからは、近藤は直近の不調を感じさせない粘りで大方キロ3'00のペースを維持するも、留学生主導の先頭集団はペースが上がり、その差は更に開いていく。

近藤は29'41"41の18位でゴール。

出場自体が危ぶまれる状況の中で大崩れすることなく粘った近藤の修正能力や勝負強さが示されたレースであったが、それゆえ直前期の故障が一層に惜しまれる。今後はコンディションのピーキングが近藤の大きな課題になりそうだ。



スパートをかける近藤(2年)

5/20(金)

10:55 男子 100m 準決勝

東大からは藤田(旭)(5年)が二組目6レーンから出走。大会二日目の午前11時頃、天候は曇り空でうすら寒い。レースは2組3着取りであった。ホームストレートには若干の向かい風が吹く。ゴール付近からの東大の応援がその向かい風に乗せられるように藤田のもとへ届く。

いよいよ2組目。ピストルが鳴りスタート。力強いスタートダッシュで進み出し、堂々とした走りで東大エースの存在感を放つ。前半を走り終え既に他走者をリード、数時間後に控えた決勝に備え力を温存しながらも2着の10"84でゴール。この時風は-1.0mであった。チームや予選で敗れた仲間の思いを背負い見事決勝進出となった。

13:05 男子 3000mSC 予選

好調の福島(5年)が出場。4月の日体大記録会5000m

でベストを27秒更新する14分30秒をマークし、その後も十分な練習量を積んでいた。昨年の予選会后、「関カレ表彰台」だけを目指して競技継続をすることを宣言。彼のこのレースにかける思いを部員一同日々感じていた。資格記録や昨年のレースの分析から、最低でも9分1桁を出せば、決勝進出が期待できた。各組5着+2が予選通過である。

気温20度でレースがスタートすると、先頭が飛び出しハイペースの縦長の集団になった。福島は先頭を意識し、第一集団の後方に位置を取った。ペースは依然速く、先頭は1000m2'54で通過、福島は3秒遅れたものの、余裕はあり10番目あたりにいた。だが、その後も先頭のペースは落ちず、集団は絞られ、福島も1000m過ぎに集団から離れる。福島は苦しくなり、2000mの通過は6'04、そのまま切り替えができずに9'16"96の14着でゴール。結局、上位4人が8分台、7着が9分3秒台と、予想外の、非常にハイレベルな展開となった。

レース前の分析では決勝進出の可能性も十分あると思われたが、想定以上のレベルに上がり、予選敗退に終わった。福島でさえ歯が立たなかった関カレのレベルを目の当たりにして、長距離部員は一層気を引き締めた。

14:55 男子 100m 決勝

この日の午前に行われた準決勝を通過した藤田(旭)(5年)は、15時頃に行われた男子二部100m決勝に登場。気温は午前よりも若干冷え込み、曇り空が広がる。

予選を二番目のタイムで通過した藤田は4レーンでのスタート。優勝の期待の大きさを示すように応援席に重い緊張が漂う。

号砲が鳴る。スタート。が、二歩目で足が崩れ若干の遅れが生じる。その遅れを取り戻そうと後半に怒涛の追い上げを見せるが、決勝のレベルは高く容易にミスを取り戻せない。惜しくも表彰台を逃す5着でのゴ

ール、4点を獲得した。タイムは追い風0.4mで10'76という数字だった。

優勝する実力は十分あっただけに、本人も悔しさを見せた。残された試合ではその実力を十分に発揮し、引き続き力強い走りを見せてほしい。

17:50 男子4×100mR 決勝

走順は予選と一緒に。天候は風が頻繁に変わりベストとは言えない状況であった。

号砲がなる。しかし、ピストルが撃たれ、「これは不正スタートではありません」のアナウンス。気を取り直して、再スタート。1走の泉(5年)が走り出す。持ち前のスタートだけではないことを200m関カレ出場で誇示した泉が走る。次は2走の西村(4年)。跳躍としてもスプリンターとしても自他ともに認めるエースの走りを見せる。そして次の松本(4年)へバトンが渡る。副将として迎える関カレ。光る肉体を駆使して4走の藤田(旭)(5年)へ。リレーの藤田は最強である。なぜならスタートが無く、バトンを貰ったら加速するのみだから。直線で前をかわしてフィニッシュ。結果は4着40"66(東大新記録)だった。

表彰台を逃したものの、4継メンバーの顔はスッキリとしていた。それは彼らがバトン練など最大限の努力をした証である。来年の関カレには、このメンバー誰一人としていないだろう。新しい4継メンバーがどうなるのかはわからないが、近いうちに「あの時は東大もまだまだだった」と言われるような日が来ることを期待したい。

5/21(土)

9:50 男子10000mW 決勝

宇野(4年)、渡邊(4年)、棟重(3年)の出場。申請記録上で渡邊の記録は1番手であり、2番手との間にもある程度の差が存在する。渡邊は同時にスタートする一部の有力選手たちには付いていかず安全に二部の選手との勝負に徹することに。そして、宇野と棟重は

自分のペースを守り前方から落ちてくる選手を拾う方針だった。

1~3部の合計46名でスタート。その内2部の選手は19名。スタート直後に抜け出した1部の選手5人が先頭集団を形成する。東大勢は焦ることなく予定通りの滑り出しを決めた。

1部の先頭の1000m通過は3'40。2部の先頭は4'03、渡邊は少し離れ4'05、宇野と棟重は更に後方でそれぞれ4'19、4'33の通過だった。そこで3番手だった渡邊は3500mで2部トップに躍り出る。渡邊の3000m通過は12'24。

2000mで宇野は13番目。3000m付近までで数人を抜き、集団に入る。集団からやや抜け出すも1周のうちに再び吸収されてしまうなど、順位を上げるのに苦戦を強いられていた。3000mは13'00、5000mは22'16で通過した。

棟重はスタートしてからずっと、後方の集団にいた。しかし、4400mで遅れ始め、単独になってしまう。そして5600mで審判により制止を受けた(ベントニー)。棟重の3000m通過は13'45だった。

長らく3人だった2部の先頭集団は、渡邊と平国大の1人のペースアップにより8500までに2人に絞られた。途中の5000m通過は20'50。ラスト1周になり渡邊がスパートをかけるも、平国も食らいつく。残り200mで平国がもう一段ギアを上げるも、渡邊はそれを上回る加速で一気に突き放し42'00"47で優勝。

宇野は後半戦で集団から脱出し、1部の選手を利用しながら、前に行く2部の選手を追う。そして追いついた国武大の選手を残り2周で離れたかと思われたがスパートに敗れ45'20"52の10位だった。

渡邊は期待に応える勝負強い歩きを見せた。宇野は惜しくも得点まで順位が2つ足りず、棟重は失格と、2人は惜しまれる結果となった。渡邊と宇野は4年生だが棟重は3年生である。来年こそリベンジを果たしてほしい。



表彰式での渡邊(4年)

11:00 男子 800m 予選

1組6レーンに加藤(4年)、4組6レーンに軽部(4年)、2組4レーンに内田(1年)の出場。4年生2人は準決勝への進出に期待がかかる。内田は今後の活躍の足がかりにできるような好レースを目指したい。

1組の加藤は少し遅めのスタート。バックストレートで一時最後尾につけるがその後のカーブで盛り返し、5,6番手で400通過。先頭の通過タイムは56"87でその約0"5ほど後ろか。カーブで様子を伺いバックストレートで一気に3番手に浮上。ラストの直線はは3位争いで混戦となり、1'55"24の4着で、プラス4の3番目の記録で準決勝進出を決めた。

2組の内田はスタートから集団の後方を推移。200m地点で8番手となり、1周目は最後尾で通過する。先頭の400m通過タイムは56"91で内田は57"7辺りで通過。そのままバックストレートで徐々に集団から離れ、一時は10mほどの間隔をあけてしまうが諦めずに粘りそれ以上は離されない。ラスト100m付近で落ちてきた一人を抜かしスパート。1'58"12の8着でフィニッシュした。

4組の軽部はブレイク後にやや後ろの6番手あたりにつくがバックストレートでスルスルとあがってきて2番手に。先頭の後ろにピタリとつける。すぐ後ろにはりついたまま400mを55"50で通過。その後も2番手のままで、ラスト100mで飛び出して先頭に立ち、最後は後ろを振り返りながら1'54"69の1着でフィニッシュ。危なげなく準決勝進出を決めた。

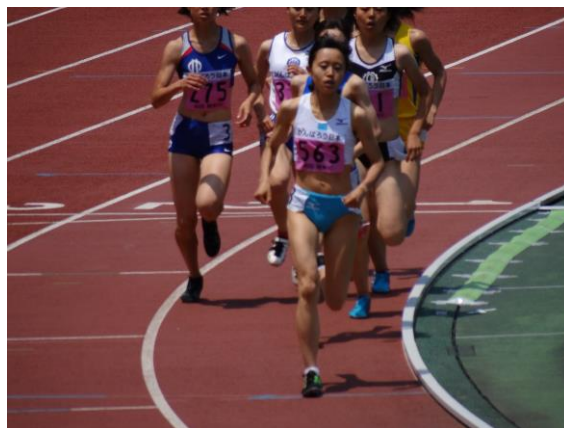
加藤、軽部は順当に準決勝進出を決めた。ルーキー内田は受験のブランクがある中、まずまずの走りといったところか。加藤、軽部の準決勝での走りに期待したい。

11:25 女子 800m 予選

3組8レーンに高石(2年)の出場。大学から陸上を始めた彼女にとって初めての大舞台でのレースであった。準決勝進出条件は4組3着+4であり、高石の申請記録は組内5番目。4番手の選手が前に出ると予想されるので、それに上手くついて行く作戦。もし出る人がいなければ自ら前が出る覚悟であった。

スタートで若干ふらついたものの、先頭でブレイク。外側から大きく前に回りこみ、2位以下を大きく引き離して第3,第4コーナーを通過。ホームストレートで差を詰められるが、先頭をキープしたまま400mの通過が64"1。2周目に入ったあたりで後続の選手4人に前に出られてしまう。そのまま5番手につけ、徐々に離されながらもなんとか持ちこたえて2'13"93の5着でフィニッシュ。自身の持つ東大記録を更新し、タイムで拾われて準決勝に駒を進めた。

前半から積極的に飛び出し、見る人をハラハラさせる展開であったが、スローに感じたら前に出るという点ではあくまで作戦通りとのこと。高石のこの走りが男子の対校選手にも力を与えたことは間違いない。準決勝ではさらなる好記録が期待された。



先頭で引っ張る高石(2年)

12:30 女子1部 400mH 予選

予選1組9レーンに坪浦(3年)の出場。準決勝への進出条件は2着+6。怪我に苦しんでいた坪浦だが5月初めの記録会で標準記録突破。この勢いに乗って準決勝へ進出することが期待されていた。東大の応援を受けると坪浦は笑顔でそれに応え、久しぶりの大舞台にも関わらず緊張せずリラックス出来ている様子。外側に選手がいない9レーンというポジションで自分でレースを組み立てなければならない難しさのなかでどう走るのか。ピストルの合図と同時に坪浦は飛び出す。前半はそれほど飛ばさない。150mほどで8レーンの選手に迫られても決して走りに乱れを見せない。第三コーナーを越えてもスピードを維持。残り100m地点で5位。ここから走りを切り替えて追い上げる。一人を抜かしてもなお、もう一人抜かしにかかる。惜しくも抜かすことなくフィニッシュするが、タイムは1:01.95。坪浦の大学ベストだった。準決勝進出を決め、持ち前の勝負強さを見せた。

13:05 男子 400mH 予選

予選1組7レーンに越村(5年)の出場。準決勝の進出条件は3着+4。資格記録だけでは厳しいかもしれないが、越村はシーズンイン以降充実した練習を積み、ベストの更新と準決勝への進出が期待された。スタート前に東大の応援を受け、それに手を上げて応える越村。少し緊張しているように見えた。

ピストルの合図と同時に越村は飛び出す。リズム良くハードルを越えていく。しかしバックストレートで内側の選手たちに捉えられる。必死についていく。第4コーナーを抜けたところで8位。7位とも距離があった。しかしそこから最後の粘りの走りを見せる。惜しくも7位は抜かせなかったが僅差でゴール。結果は56秒17の9着だった。越村は休む暇もなくマイルへ向けて準備に向かった。

13:55 男子3部 200m 決勝

5レーンに小西(M1)が出場。前日の400mにおいては49"13の好タイムで優勝しており、200mでも入賞・好タイムが期待できる。

試合当日は晴天で湿度も低く、申し分のない天候の中で号砲が鳴った。快調な滑り出しを見せた小西だったが、コーナーを抜けたあたりから6、8レーンの選手がスピードに乗り引き離していく。ラスト50mで必死に追い上げる小西だったが結局4着でフィニッシュ。

結果としては入賞を逃したものの、記録としては21"94の好タイムをたたき出した小西。今後の活躍に期待したい。

14:00 男子 200m 予選

1組2レーンに藤田(旭)(5年)、4組5レーンに泉(5年)、そして5組2レーンに稲葉(5年)の出走で行われた。藤田は資格記録では予選通過は妥当、泉は持ち記録だけを見れば苦しいが、GWに標準を切ったという勢いがあり、その勢いを生かしての予選突破が期待されていた。稲葉は資格記録では出場者中5位という好記録であり、順当にいけば予選通過と思われていた。

予選1組の藤田は、コーナーを終えた辺りでは4着で、万事休すかと思われたが、後半100mで驚異的な伸びを見せて3着の選手を抜き、3着でゴール。辛くも予選を通過した。タイムは21"64(+0.1)であった。

4組の泉は、前半で差をつけられるも、残り50mから大きく追い上げた。しかし、あと一歩及ばず4着でゴール。惜しくも予選通過を逃した。タイムは21"90(+1.1)であった。

5組の稲葉は、コーナーを回ったところで3人の選手と横一線。しかし直線に入ってから、その内2人と後ろに着けていた選手1人が急激に追い上げ、泉同様4着でゴール。予選突破はならなかった。タイムは22"02(+1.1)であった。

16:20 男子 4×400mR 予選

1組6レーンに加藤(4年)、4組6レーンに軽部(4年)、2組4レーンに内田(1年)の出場。4年生2人は準決勝への進出に期待がかかる。内田は今後の活躍の足がかりにできるような好レースを目指したい。

1組の加藤は少し遅めのスタート。バックストレートで一時最後尾につけるがその後のカーブで盛り返し、5,6番手で400通過。先頭の通過タイムは56"87でその約0"5ほど後ろか。カーブで様子を伺いバックストレートで一気に3番手に浮上。ラストの直線はは3位争いで混戦となり、1'55"24の4着で、プラス4の3番目の記録で準決勝進出を決めた。

2組の内田はスタートから集団の後方を推移。200m地点で8番手となり、1周目は最後尾で通過する。先頭の400m通過タイムは56"91で内田は57"7辺りで通過。そのままバックストレートで徐々に集団から離れ、一時は10mほどの間隔をあけてしまうが諦めずに粘りそれ以上は離されない。ラスト100m付近で落ちてきた一人を抜かしスパート。1'58"12の8着でフィニッシュした。

4組の軽部はブレイク後にやや後ろの6番手あたりにつくがバックストレートでスルスルとあがってきて2番手に。先頭の後ろにピタリとつける。すぐ後ろにはりついたまま400mを55"50で通過。その後も2番手のままで、ラスト100mで飛び出して先頭に立ち、最後は後ろを振り返りながら1'54"69の1着でフィニッシュ。危なげなく準決勝進出を決めた。

加藤、軽部は順当に準決勝進出を決めた。ルーキー内田は受験のブランクがある中、まずまずの走りといったところか。加藤、軽部の準決勝での走りに期待したい。

5/22(日)

9:00 男子ハーフマラソン 決勝

近藤(2年)の出場。気温は約25度で、日差しも強かったため、とてもハードなコンディションでのレースとなった。コースは、まずスタジアムを出たあと、一

周2キロほどのコースを9周し、スタジアムに戻るというものであった。

9:00にスタート。序盤から日本薬科大学の留学生がハイペースで引っ張り、1キロあたりで早くも集団がばらけた。1周目、近藤は第2集団後方で走っていた。順位は20位ほどで、積極的な走りをしていた。2周目はややペースが落ち、第3集団後方の30位あたりに落ちた。5キロ通過は15'23。先頭集団の15人との差が徐々に開き始めていた。

3、4周目は、先頭では留学生がペースアップを繰り返し、先頭が7人に絞られた。近藤は第4集団に抜かれ、48位に落ちる。かなり苦しいレース展開となった。10キロ通過は32'24で、5キロ～10キロは17'01もかかってしまった。先頭との差も2分を越えた。

レースもいよいよ後半戦。5、6周目、先頭から3人が遅れ、残ったのは日本薬科大のカリウキ、昨年チャンピオンの池田、中央学院大の大森、そして駒澤の大塚の4人となった。近藤は後ろから来た駿河台大学の選手の後ろにつき、立て直しを図る。順位は60位周辺。

7、8周目、先頭集団から大塚、大森の順に遅れる。去年1位、2位だった2人に絞られた。近藤は先ほどついていた駿河台大学の選手にも離され、かなり苦しい状況。15キロ通過は50'20。このあと、近藤は先頭の周回遅れになり、失格となってしまった。結局レースを制したのは青山学院大の池田(64'17)であった。

近藤は、今大会の1ヶ月ほど前から調子を落とし始め、かなり悪いコンディションでレースに臨む形になってしまった。それでもチームのために点数をとろうと、10000では入賞を狙うような走りをしてくれた。しかしハーフマラソンのほうでは準備不足が出てしまった。こうなってしまった原因は、近藤が調子を落としてしまったこともあるが、近藤を一人にしてしまったことが大きいと思われる。今回長距離ブロックから出場したのは近藤と福島(5年)の2人のみ。点を取らなければというプレッシャーも大きかったはず。次回はもっと多くの出場者を出していくことが必要だと思われる。

10:30 女子 400mH 準決勝

2組3レーンに坪浦(3年)の出場。決勝への進出条件は3着+2。タイムだけでみれば厳しいレースになることが予想されたが、坪浦は予選にて好タイムをたたき出し、さらなる好記録が期待された。

予選と同じく笑顔で東大の応援に応える坪浦。落ち着いた様子でスタートブロックに足をかける。ピストルの号砲とともに飛び出した。前半からスピードを出しに行く。第2コーナーを抜けたところで速度を安定させ軽やかに走っていく。しかし200mほど走ってやや減速。外側を走る選手において行かれてしまう。残り120mの地点で7位。ラストスパートで懸命に前の選手たちを追いかけたが、そのまま7位でゴール。タイムは1:02.35。レース後には自分の走ったレーンと、応援してくれたスタンドの東大陸上部員への一礼も忘れなかった。

残念ながら決勝進出は叶わなかったが、坪浦の力走は多くの仲間たちを感動させた。来年の関カレに大いに期待できる。



準決勝での坪浦(3年)

11:15 男子 800m 準決勝

1組2レーンに加藤(4年)、2組4レーンに軽部(4年)の出場。加藤は昨年準決勝で敗退しており、ここが正念場で、軽部は3年連続の決勝進出に向け、それぞ

れにとって重要なレースとなる。

1組の加藤はブレイク後果敢に先頭を走るも200mあたりで集団の5番手あたりに後退。集団の最後尾に着く展開となる。先頭の400mの通過は54"43でその集団の6番手に加藤がつける。終始前を狙うも2周目のバックストレートで集団と離れ始め、最後の直線に入る手前で10mほどの間をあけてしまう。スパートをかけたが届かず1'55"86の7着で準決勝敗退となった。

2組の軽部もブレイク後、先頭に出る。200m付近で急に後続に飲み込まれ5番手あたりに後退するが、ホームストレートで追い上げて先頭に立ち、1周目は56"40で通過。その後は最後まで先頭を譲らず、ラストは後ろを振り返り1着を確信したのかやや流して1'53"98の1着でフィニッシュし、決勝進出を決めた。

決勝進出を目指した加藤は惜しくも敗退、昨年決勝で2位の軽部は順当に決勝へと駒を進めた。決勝での軽部の好走を期待したい。

11:30 女子 800m 準決勝

2組3レーンに高石(2年)の出場。決勝進出条件は2組3着+2。600mまでは速めに入って貯金をつくり、残りの200mで粘って着順での決勝進出を狙った。また、全日本インカレの標準記録2'13"00突破も期待された。

今回は問題なくスタートし、7番手でブレイク。アウトレーンの選手が前半からかなり飛ばして入り、他の選手もつられるように速くなった。外側から前の選手を捉え、400mの通過は4番手で63"0。しかし前に出る機会をうかがって後ろに控えていた選手がバックストレートで続々と上がりはじめると、最後尾まで落ちてしまう。ホームストレートでは渾身のスパートでなんとか2人をかわし、2'14"66の6着でゴール。惜しくも準決勝敗退となった。

初めての大会舞台であったにも関わらず、物怖じすることなく資格記録の速い選手たちとも対等に渡り合ったことは非常に高く評価できる。今シーズン初戦か

らすでに3秒自己記録を更新しており、その伸び代は計り知れない。この調子で全日本インカレの標準記録を突破し、全国の舞台でも活躍してもらいたい。

12:00 男子 200m 準決勝

2組に出場した藤田(旭)(5年)は、前半から他の選手に大きく差をつけ、後半も調子を落とすことなくトップを維持し、1着でフィニッシュ。タイムは21"35(+2.1)であった。追い風参考のため、PBとはならなかったが、調子の良さを感じさせる走りであった。

14:00 男子 800m 決勝

4レーンに軽部(4年)が出場。軽部は昨年の関東インカレで同種目2位の成績を残しており、今年も予選準決を共に組1着で通過し、順当に決勝に駒を進めてきた。優勝、そして東大記録の更新に期待がかかる。

ブレイク後多少の順位変動がある中、最終的に4番手につける。軽部は4番手につけたまま55.0で400mを通過。自己ベスト及び東大記録も狙えるハイペース。2周目も順位変動がないまま先頭集団は600mを通過。ここで各選手がスパートをかける。軽部はカーブに入ってからすぐに6番手に後退するが追い上げて、カーブで1人を抜き返す。最後の直線でさらに1人をかわし、1'52"19の4位でフィニッシュした。

自己ベストまであと0"09にせまる、昨年よりも良いタイムでフィニッシュしたものの、昨年よりも順位を落とし、目標としていた全カレ標準にも僅かに及ばずに、本人としては悔しい結果に終わった。今後のレースで全カレ標準の突破などのさらなる活躍に期待したい。

14:30 男子 200m 決勝

決勝に進んだ藤田(旭)(5年)は、前半飛び出しはうまくいったように見えたが、やはり決勝、コーナーを終えても差はつかず、ほぼ横一線。直線に入ってから1つ内側のレーンを走る選手と競る形となった。しかし、それも東の間、自他共に認めるトップスピードの

高さを生かし、大きく差をつけ、1位でゴールした。タイムは21"39(-1.5)であり、PBであった。

結果は藤田が8点獲得。しかし、泉、稲葉兩人による得点の可能性もあったことであり、リレー、100mによる負担がなければまた違った結果があったかもしれず、選手層の薄さが懸念される試合となった。



ガッツポーズを決める藤田(5年)

15:20 男子 5000m 決勝

福島(5年)の出場。気温が28度と長距離種目には過酷な暑さの中でのレースとなった。申請記録上では46人中の40番目だった福島だが、今年に入り大きく自己ベストを伸ばし、勢いに乗っていたため、記録以上の活躍が期待された。

15時20分定刻通りにレースがスタート。縦に長い一列が形成される。福島は10番～15番前後でレースを進める。最初の1000mを2'44で通過。その後、前を行く選手についていくものの1600m付近で離され始める。2000mの通過は5'39、この間の1000mは2'55。その後は暑さと序盤のオーバーペースからか、順位を大きく下げってしまう苦しい展開となった。3000mの通過は8'56、4000mの通過は12'17と、1000mあたり概ね3'20までペースを落とす。しかし、ラストの一周は力を振り絞りペースアップ。最高学年としての意地

を見せてくれた。

結果は15'30"63で39位。決して満足のいく結果ではなかったかもしれない。しかし関東インカレにかけ強い気持ち、果敢に挑戦していく姿、最後まで諦めない姿勢は陸上選手としてのあるべき姿を後輩たちに示してくれた。福島は箱根駅伝の予選会で雪辱を誓う。

◎フィールド種目

5/19(木)

10:00 砲丸投 決勝

奥村(4年)の出場。今年で3回目であったが冬季に腰を痛めたことが響き殆ど調整どころか練習も積めないままでの試合であった。去年のインカレで出したベスト記録に如何に近づけてトップ8に残れるかが肝要であった。

練習投擲では上手く調整してそれなりの調子を見せてはいたものの1投目は力が出ず9m93で、この時点で既にトップ8ラインは12m中盤付近までいっていた。修正していつも通りに投げればまだトップ8は狙える場所にあった。2投目は完全に体勢を崩してサークルから出てしまいファール。3投目で何とか修正は加えられたもののやはり練習不足が祟り記録は10m83で23番手の予選落ちとなった。

5月の国公立戦には間に合わないだろうが四大戦以降では投擲パートエースとしての彼の復活に期待していきたい。

5/20(金)

10:00 走高跳 決勝

福永(4年)の出場。天候は曇りで風はやや冷たく感じられ、ベストコンディションとは言いがたいものだった。

他の選手と比べても実力的には優勝は狙うことができた。練習跳躍が1m90から始まったが、体が当たってしまう。2m00の練習跳躍も失敗しあまり調子が

上がっていないように思われた。

そのような中、試合は開始され1m95から試技が開始された。福永の1本目はうまく体を浮かせることができず、失敗。その後、福永は以降の試技を棄権した。

結果はNMとなった。試合前に足首を痛めての出場だったが、関東インカレ以降の試合も考慮した結果の棄権であり、今後は足首の治療に専念する。

15:30 三段跳 決勝

吉田(4年)、木下(2年)の出場。主将で前回大会チャンピオンである吉田は、資格記録14m94で事前ランキング4番手、木下も得点に絡める実力を持っているため、どちらも入賞への期待が大きかった。

肌寒さを感じるなか競技が開始した。風の強さ、さらに向きも頻繁に変わり、跳躍競技にとっては少しやりにくいコンディションであった。

吉田は2本目に14m68(+1.0)をマークして、3番手として決勝に残る。一方、木下は風のタイミングをはずし、冷静に試合をするが、足が踏み切り板に乗らない。2本目に踏み切り線から30cmほど離れた位置から14m24(+0.0)をマークし、3本目に懸ける。この時点で14m46が決勝通過ラインになっていた。木下にも決勝進出の期待がかかるが、3本目も再び約30cm手前での踏み切りをして14m44(+1.7)となり、2cm及ばず競技終了。

決勝では残った選手が記録を伸ばすなか、吉田は思うような跳躍ができない。最終6本目、他の選手が記録を更新して暫定8番となった状況で、気合の入った跳躍をするが記録は伸びず、3本目が最長の記録となり、吉田は14m68(+1.0)の8位、木下は14m44(+1.7)の9位で競技を終えた。

木下の記録はPBであった。しかし、吉田、木下ともに上位入賞の可能性が十分にあっただけに悔いの残る結果となってしまった。思い入れの強い関東インカレで満足な結果は出せなかったが、以降の大会での活躍が期待される。

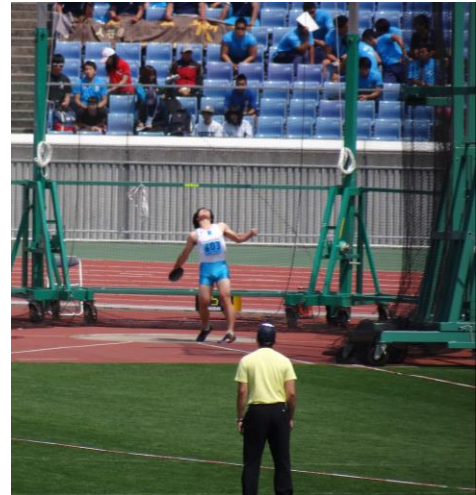
5/21(土)

10:00 円盤投 決勝

土井(3年)の出場。今大会が関東インカレ初出場となる土井は、申請記録によるランキングからは厳しい試合になることが予想された。練習投擲では強豪校の選手と同等まではいかないものの、それなりに調子の良さがうかがえた。

試合が始まり、1投目。この投擲は円盤がぶれてしまい、全く飛距離が出せず、24m05。1回目の試技から実力のある選手たちは記録を伸ばし、トップ8のラインがおおよそ37mのあたりまで上がる。続く2投目は投げ自体は良く、飛距離もそれなりに出ているが、横に逸れてしまい失敗投擲に終わってしまう。2回目の試技では記録を伸ばした選手はあまりおらず、トップ8のラインはあまり変わらず。トップ8に残るための最後のチャンスである3投目。この時点でのトップ8のラインは37m15。去年の京大戦で35m00を残していることを考えると、一発ハマれば可能性がある記録であった。その3投目は綺麗に投げる事ができたが、記録は33m75とトップ8のラインには届かず競技終了となった。結果は33m75(セカンドベスト)の18位であった。

今回は残念な結果となってしまったが、今のベストを考えるとトップ8のラインはそれほど遠いものではない。今後の成長次第で、来年は上位入賞も十分可能な位置にいる。彼の今後に期待である。



33m75に終わった土井(3年)

15:00 ハンマー投 決勝

関東インカレ2部の最後の投擲種目、ハンマー投には鍵本(4年)が出場。いまだ得点ゼロの投擲パートに得点をもたらしてほしい。申請記録を見ると鍵本はかなり下の方で、トップ8には47~8mくらいの投擲が必要と厳しい戦いにはなりそうだが、練習では40m越えの投擲も見せており、うまくはまれば得点争いに絡めるだろう。2回目の関東インカレの舞台で落ち着いて実力を十分に発揮してほしい。

競技が開始され、1投目は3回転で投げたがやや軸がぶれ、左にそれてファールとなってしまった。2投目にはなんとか修正して39m11の記録を残す。この段階で8位の記録は46m程度だった。追い詰められた鍵本の3投目は応援もむなしく左にそれてファールとなり、39m11の15位で競技終了となった。

全体としてターンの安定性に欠いていたように見える。技術をうまく修正して七大戦ではその巨体を生かした大きな投擲を期待したい。

15:30 走幅跳 決勝

西村(4年)、深澤(4年)の出場。天候は晴れで暖かったが、風向きが不安定で助走への影響がやや懸念された。

4×100mRにも出場した西村は3日連続での出場であった。資格記録上では十分表彰台を狙える位置にいた。持ち味のスピードを武器に1本目の跳躍に臨むも、着地の際に手をついてしまい6m84(-0.5)の記録に留まる。2本目の跳躍ではわずかに粘土板を踏みフェール、3本目の跳躍は足が合わず走り抜ける形となり、結果17位であった。今後の試合で全日本ICの参加標準切りを狙う。

深澤は走幅跳のみの出場で、資格記録上ではベスト8に残るためには自己ベストの更新が必要だった。そのため、攻めの姿勢で試合を展開した。集中して跳躍に臨んだが、1、2本目の跳躍は惜しくもフェールとなる。追い込まれた状態での3本目の跳躍では6m91(+1.6)をマークして13位で競技を終了した。

残念ながら、両選手とも実力を十分には発揮できなかった。しかし今後の対校戦ではぜひ活躍し、表彰台に並んでほしい。

5/22(日)

10:00 棒高跳 決勝

男子2部棒高跳には松下(4年)と三宅(1年)が出場。天候は晴れで気温も適度だったが、日産スタジアム特有の変化する風が時に選手を苦しめた。松下は自己ベストこそ4m40で臨んだものの、それ以上の高さで惜しい跳躍を何度も見せており期待がかかる。三宅はまだ試合数をこなしておらず未知数だ。

松下は自己ベスト4m50を余裕をもってクリアし4m60に挑む。体は浮いているのだが、めまぐるしい風の変化に阻まれて惜しくもクリアならず。悔しさが募る中、すぐさま上野と三宅に声援を送る姿が印象的だった。三宅はのびのびと試合をして、4m70の大学ベストをマークした。

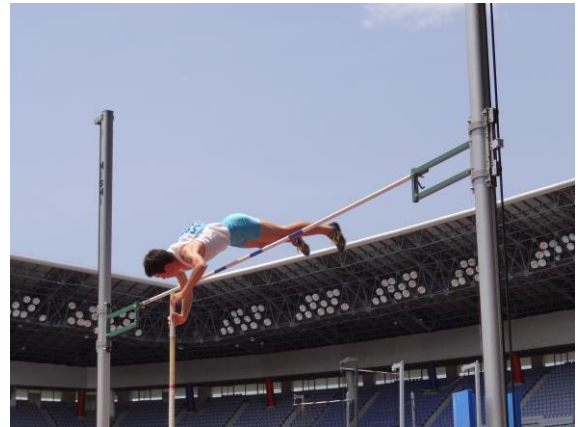
今後の二人の戦いがおもしろそうだ。

男子3部棒高跳には上野(M2)が出場。上野はほとんど跳躍練習ができていない状態で挑んだ今大会だったが、院生らしい落ち着きがあった。

最初の高さ4m20を難なくクリアすると、続く

4m40は3回目のクリア。見ている者の心配をよそに余裕の表情を見せていた。次は4m50をパスし4m60に挑戦。体は大きく浮いているもののアップライトが合わず、これは3回とも失敗となった。

院生は忙しく、試合に向けての調整が困難な様子だったが、終始競技を楽しむことを忘れない姿勢が印象的だった。



1年生で5位入賞の三宅

◎十種競技

5/19(木)

9:30 100m

当日朝のグラウンドコンディションは良好。東大競技会、国士館記録会と徐々にベストを更新しての関東インカレではさらなる好記録が期待される。加来は1組5レーンでのスタート。勢いのある飛び出しを見せていきなり先頭に立つと、そのままさらに加速して他の選手に3メートル程の差をつけて11"28(-0.2)の1着でゴールし自己ベストを0"05更新する好レースであった。100m終了時点で779点を獲得した。



100m から好発進する加来(4年)

10:45 走幅跳

試合前にコツを掴んだと言っていた走幅跳では100mの勢いそのままに自己ベストの大幅な更新が期待される。一回目の跳躍では目測6m後半は行ったかと思われたが、惜しくもファールしてしまう。続く二回目、ゆったりとした加速からリズムを切り替えスピードアップし、直前でテンポアップ、練習していた着地もうまく決まり記録は6m47(-1.2)。最後の三回目、ピットに入り神経を研ぎ澄ませた後、助走を開始する。文句のない跳躍を見せて6m61(+1.7)。国士舘記録会から自己ベストを33cm更新しての723点を獲得した。

12:45 砲丸投

10mに近いベストを持つ加来は砲丸投でも得点を稼ぐことが期待されたが、1ヶ月前に痛めた肩の影響がどれだけ残っているかが不安視されていた。記録を残すことを重視する1投目、まずは8m37の記録を残すことに成功する。少なくとも9m台の記録が求められる2投目、グライドのスピードを投げる直前に殺してしまい記録は8m33。続くあとがない3投目でもグライドのスピードが伝えられず記録は8m34。結局一投目の記録が残り、砲丸投では8m37で388点であった。

15:00 走高跳

加来の十種競技の中でのこの種目の自己ベストは1m70.5cm違うと点数にして40点違うのでここで砲

丸投の取りこぼしを回収することが期待される。1m65から競技を開始して、1m65、1m70と難なくクリアする。次の高さは1m75。一回目、二回目とほぼバーを越えているが惜しくも落としてしまう。三回目、リラックスした助走からしっかり踏み切り、見事クリア。続く1m80は失敗してしまうが、疲れた中での1m75で585点を獲得する。

18:10 400m

最後の400mでは東大競技会で50"51をマークしており、疲労している中ではあるが、今大会でも力走が期待される。加来は2組2レーンでのスタート。スタートから200mは内側からの落ち着いたレース運びを展開し、250m地点からはギアを上げて前の選手を猛追していく。ラストまで粘るが前の国武大の二人は惜しくも捉えられず、3着でゴール。記録は51"51であった。

5/20(金)

9:30 110mH

二日目の最初の種目の110mHは加来の得意種目であり15"78の自己ベストを持つ。また、同じ組には一日目を3159点で終えた東学大の富田もおおり、3241点の加来との勝負が注目される。加来は2組7レーンのスタート。勢い良く飛び出し1台目でトップに出る。2台目、3台目と進むにつれて国武大の選手にジリジリと前に出られるが、加来も喰らいつき最後は富田と競ってのゴール。タイムは15"79(-0.7)であり、自己ベストに迫る好記録であった。

10:40 円盤投

普段の練習で投擲選手顔負けのターンを見せている加来には十種競技者として上位に立つラインである30mに届く投擲が期待される。練習では軽快なターンを見せていた加来だったが、一投目では力んでしまい、ネットに当ててファールしてしまう。続く二投目では、一投目のファールがプレッシャーになってしまったのだろうか、ターンのステップが途中で浮いて

しまい円盤に力が伝わらず、18m34。三投目でも練習で見せていたような投げを見せることができず、18m28で試技終了。少なくとも20m後半は投げたおきたかっただけにかなりの点数を取りこぼしてしまうことになってしまった。

13:00 棒高跳

棒高跳では持ち前の運動神経で春になってからぐんぐん記録を伸ばしており、群馬での合宿にも参加して更に磨きをかけていた。ただ、三週間前の練習で手に怪我を負ってしまい直前にあまり練習出来てないことが唯一不安材料であった。加来は3m00から試技を開始する。3m60のベストを持つ加来は3m00から競技開始して3m30まで難なくクリアする。しかし、二日目の三種目目ということもあり疲れが見えてきたのか二跳目、三跳目はポールをうまく立たせることができず、失敗してしまう。結局3m30で試技終了し、431点を獲得した。

16:00 やり投

投擲種目の中で最も苦手とするやり投は関東インカレに向けて集中して練習を積んできて伸びしろの大きい種目であった。一投目で早速自己ベストとなる34m71をマークする。二投目でも35m25をマークして更に記録を伸ばすことに成功する。助走を伸ばして投げた三投目では線のかなり前で投げたがスピードがやりにうまく伝わり記録は37m41。自己ベストを5メートル程更新して405点を獲得した。

18:20 1500m

一秒でおおよそ6点変わる1500mでは最後に大きく逆転することも稀ではないため、この種目での入賞ラインへの食い込みが期待される。加来は12レーンでのスタート。最初から飛び出していく選手がいるものの、加来は落ち着いて第二集団についていき、一周目を71秒で通過する。そのまま余裕のあるフォームで二周目の通過は79秒。ペースアップするものの前の選手とはギリギリと差をつけられて三周目を75秒で

通過する。最後の200mで残った力でスパートをかけてそのままゴールする。タイムは4'39"69で682点を獲得した。

男子二部・三部混成競技総括

二日間とも快晴で、風も落ち着いている良好なコンディションで試合が行われた。

十種競技関東インカレ初出場であり、砲丸投、円盤投などの普段なれない種目では取りこぼしをしてしまったものの、大幅にベストを更新した種目も見られて、十種目終えてみると自己ベストである5757点をマークすることができた。国武大、学芸大が参加する非常にレベルの高い大会だったため入賞こそ逃してしまったが、あと一步の10位と健闘することができた。

3. 選手の言葉

短距離4年 松本大樹 (4×100mR)

短距離4年の松本大樹です。今回の関東インカレでは400mリレーの第3走者を務めさせていただきました。

5位に終わった昨年の関東インカレから1年、日産のトラックを淡青の大声援を受けて走り、表彰台の一番高い場所に立つことを何度も何度も思い描いてきました。しかしながら、結果は関東2部4位、40"66と東大記録を僅かに更新したに過ぎず、39秒台も、表彰台すら、届きませんでした。平素よりご声援を頂いております皆様に、そして今後の陸上運動部を担っていく後輩達に「強い東大」の姿を見せられなかったことは、おそらく一生の心残りとなるでしょう。

結果を差し置いてこう言うことも烏滸がましいかもしれませんが、それでもやはり、あの舞台で大声援の中走ることができたのは、本当に幸せでした。後輩

達に「強い東大」を作り上げていってもらうために、残された4年生がすべきことはあらゆる対校戦に勝利すること。そのためにも、自分もまだまだ強くなります。

最後になりますが、この4日間ご声援を頂き誠にありがとうございました。今後とも自分含め陸上運動部の活動を気にかけていただきますと幸いです。

短距離4年 加来宗一郎 (十種競技)

十種競技に出場させていただきました短距離4年の加来宗一郎です。結果は5757点で10位でした。

まずは応援してくださった方々、そしてサポートしてくれた方々本当にありがとうございました。これほど周りの人の支えが必要になる競技はないと思います。日々の練習から何から良い環境を与えてくれた東大陸上部に感謝しています。

今回の試合は自分に考えつくことはすべてやって出場しました。試合当日も会場の空気に飲まれることもなく、集中していました。

しかし、下馬評を覆すことはできませんでした。砲丸と円盤で距離が伸びず、投てき種目の技術が安定していなかったことを痛感させられました。

自信を持って臨んでいただけに残念です。100m、幅跳、高跳、槍投、1500mの五種目が自己ベストで地力がついてきているように思います。今後は投てき種目と棒高跳の練習に力を入れて、全日本インカレの標準突破を目指します。よろしくお祈りします。

短距離2年 坪浦諒子 (400mH)

私が標準切りしたのは、締切最終日かつタイムもギリギリで、ランキングはほぼ最下位。予選通過も厳しいかと思わずにはいられませんでした。しかし試合1週間前から不思議な程に調子が上がり、当日はどのくらい走れるのか自分でも楽しみでした。予選は歩数のミスがあり納得のいくレースではありませんでしたが、大学ベストを1秒以上更新して準決勝に通過でき、

まだまだ行けると確信しました。準決勝ではミスなく走って全カレ標準切りと決勝進出を目指しましたが、そう甘くはなくどちらも達成する事は出来ませんでした。自分の実力不足、そしてここで勝負したいという思いを心から味わう試合になりました。

大学で陸上を続けたのは、また400mHで勝負したいと思ったからでした。思い通りにならないことが多く、1・2年生では苦しい思いをすることばかりでした。3年目にしてやっと関東インカレの舞台に立て、スタートラインに辿り着いたという思いです。私は大きな試合が好きだし、そこで勝ち進んでいきたい。その為に必要なことが浮き彫りになりました。着実に力をつけていき、7月までに全カレ標準を切ることを、今年中に自己ベストの59"06を更新することを目標に頑張ります。

久々の大舞台は本当に楽しかったです。多くの方の応援が本当に力になりました。ありがとうございました。

中距離4年 軽部智 (800m)

関カレに対する情熱は人一倍あり、ここには書ききれません。関カレで優勝したいと思って陸上をやってきたので、非常に悔しいです。昨年度2位であったことを考えると、不甲斐なくて仕方ありません。部の結果も昨年を大きく下回り、何が悪かったのか、もっと考えなければいけないと思います。

ただ、決勝の記録はセカンドベストであり、私が今持っている力を出し切ったと思っています。私の結果に関しては、そもそもの実力が足りなかったと認めざるをえません。

次の目標は全日本インカレで活躍することです。目標は遠く、このまま燻ってはいられないので、しっかり前を向いて努力していきます。

応援ありがとうございました。

競歩4年 渡邊成陽 (10000mW)

今回のレースに臨むに当たり、確実に勝って8点を取ることを目標としました。個人としてこれまでの関東インカレが微妙な結果であり、リベンジしたいという思いがありましたし、何しろ部の皆が関東インカレに向けて頑張ってくれていたことに対して結果で答えたかったからです。レースの内容としては2部の選手をマークし、ラストで勝負を決めるというもので、面白みに欠けましたが目標は達成できたので良しとします。持ちタイムや実績でも他の選手とは差があり、レース後も余力がありましたが現状では失格の可能性を排除しきれなかったところがこのようなレース運びとなった原因です。全カレといった他のレースで戦うには改善の余地が大きいと感じました。

中距離2年 高石涼香 (800m)

今年関東インカレに初めて出場させて頂きました。中距離2年の高石です。陸上をはじめてから一番の大舞台、緊張こそしましたが、中距離の他の出場者には4年生の頼もしい先輩方や今後の活躍が期待される1年生がおり、その存在が心強かったです。

4月末の記録会で標準2'16"5を切り、その後の練習も順調で、自信をつけて臨むことができました。予選は4組3着+4のレースでしたが着順では厳しいと考え、タイムで拾われることを考え積極的にレースを展開しました。その結果準決勝に駒を進めることができ、決勝には残ることは叶いませんでしたが、貴重な経験をすることができました。今後は7月までに全日本インカレの標準2'13"0を切り出場することを目指します。そして来年こそは関東インカレの決勝に進みます。

関東インカレは陸上に対する姿勢や今後の目標も大きく変えるような舞台でした。応援やサポートなど、本当にありがとうございました。

跳躍4年 松下周平 (棒高跳)

4日目最終日、棒高跳に出場させていただきました。

1~3日目のフィールド種目ではあまりいい流れで

はなかった中、自分は自分の仕事をしよう、そのための準備や自信は備えているつもりだと試合に臨みました。もちろん自分のために、そしてジャンプパートの意地を見せるためにです。

ただ、幸運なことなのか私はこの部の一番手ではありませんでした。今年入学した三宅(1)の存在です。そして3部では長年お世話になっている上野さん(M2)も出場されており、心強い味方がいる中での試合となりました。

当日、やはり緊張はするもので一本目は肩に力が入りながらの助走でした。しかしそこで何とかクリアできたことが今回のPB更新の大きな要因かと思います。そのクリアにより肩の力が抜け、4m50までうまく調子を上げていくことができました。

しかし、そこからは完全に自分の中での甘えが出てしまいました。一年強ぶりのPBを更新したことに確かに安堵し、ギラギラした感情が少し減ってしまったように感じてしまいました。これは良くないと一回自分の中のスイッチを切ったところで思いのほか試技の周りが早く、うまく気持ちを盛り上げられないままに4m60の2回目に臨んでしまい、あきらかに精細を欠いた試技をしてしまいました。

こういった甘えの部分を猛省し、これからまだまだ活躍していくであろう三宅とともに更なるPB更新をしたいと思っております。

また、ジャンプパートは私以外にも実力は十分に兼ね備えている部員ばかりです。今回の結果をそれぞれが真摯に受け止め、残りの対校戦では本気で勝ちにいくつもりでありますので、変わらぬご支援、応援のほどよろしくお願い申し上げます。

4. 試合結果

第95回関東学生陸上競技対校選手権大会

男子 100m**予選(5組3着+1)**

2組(-0.9)

6着 稲葉 啓人 10"98

3組(-1.0)

1着 藤田 旭洋 10"80

4組(-1.2)

4着 泉 悠太 11"05

準決勝(2組3着+2)

2組(-1.0)

2着 藤田 旭洋 10"84

決勝 (+0.4)

1 小林 一成 駿河台 10"66

2 田中 佑典 ウェルネス大 10"72

3 渡辺 一希 駿河台 10"72

4 石井 裕也 東農大 10"61

5 藤田 旭洋 東大 10"76

6 前原 宙哉 作新大 10"83

7 清水 勇登 駿河台 10"85

8 綱島 凌 聖学大 10"86

男子 200m**予選(5組3着+1)**

1組(+1.0)

3着 藤田 旭洋 21"64

4組(+1.1)

4着 泉 悠太 21"90

5組(+1.1)

4着 稲葉 啓人 22"02

準決勝(2組3着+2)

2組(+2.1)

1着 藤田 旭洋 21"35

決勝 (-1.5)

1 藤田 旭洋 東大 21"39

2 石井 裕也 東農大 21"58

3 青柳 明日翔 東農大 21"60

4 前原 宙哉 作新大 21"65

5 加藤 裕介 東学大 21"74

6 福谷 龍也 ウェルネス大 21"85

7 糟谷 翔 東経大 22"05

8 渡辺 一希 駿河台 32"74

男子 400m**予選(4組3着+4)**

3組

6着 森本 淳基 49"88

男子 800m**予選(4組3着+4)**

1組

4着 加藤 騎貴 1'55"24

2組

8着 内田 智拓 1'58"12

4組

1着 軽部 智 1'54"69

準決勝(2組3着+2)

1組

7着 加藤 騎貴 1'55"86

2組

1着 軽部 智 1'53"98

決勝

1 大木 学 千葉大 1'51"31

2 齋藤 未藍 青学大 1'51"48

3	鹿居 二郎	亜大	1'51"60
4	軽部 智	東大	1'52"19
5	青柳 良英	横国大	1'52"37
6	棗 大吾	青学大	1'53"76
7	庄司 貴紀	駿河台	1'56"20
8	古谷 樹仁	東農大	1'59"38

男子 5000m 決勝

1	一色 恭志	青学大	13'51"15
2	Muthoni Muiru	創価大	13'52"35
3	鈴木 墨人	青学大	13'58"48
4	田村 和希	青学大	14'08"18
5	Workneh Derese	拓大	14'12"14
6	セルナルト 祐慈	創価大	14'12"57
7	加藤 風磨	亜大	14'12"65
8	西山 雄介	駒大	14'12"65

39 福島 洋佑 東大 15'30"63

男子 10000m 決勝

1	中谷 圭佑	駒大	28'43"96
2	一色 恭志	青学大	28'45"33
3	鈴木 健吾	神大	28'50"13
4	Simon Kariuki	日薬大	29'02"12
5	セルナルト 祐慈	創価大	29'05"76
6	大森 滯	中学大	29'06"71
7	Workneh Derese	拓大	29'11"48
8	下田 裕太	青学大	29'14"04

18 近藤 秀一 東大 29'41"41

男子ハーフマラソン決勝

1	池田 生成	青学大	1.04.18
2	大森 滯	中学大	1.04.23
3	Simon Kariuki	日薬大	1.04.33
4	大塚 祥平	駒大	1.04.44
5	森田 清貴	上武大	1.05.14
6	Siteki Stanley	東国大	1.05.20
7	畔上 和弥	帝京大	1.05.40

8 柴田 拓真 平国大 1.05.44

近藤 秀一 東大 DQ

男子 400mH

予選(4組3着+4)

1組

9着 越村 真至 56"17

男子 3000mSC

予選(2組5着+2)

1組

14着 福島 洋佑 9'16"96

男子 10000mW 決勝

1	渡邊 成陽	東大	42'00"47
2	滝沢 大賀	平国大	42'04"11
3	遠藤 克也	東農大	42'19"31
4	西口 克洋	立大	42'23"71
5	高橋 直己	東学大	42'44"16
6	青山 福泉	東学大	42'46"40
7	斉藤 凱	平国大	43'34"77
8	平根 潤一	国武大	44'41"71

10 宇野 文貴 東大 45'20"52

棟重 賢治 東大 DQ

男子 4×100mR

予選(5組1着+3)

5組

1着 東大 泉-西村-松本-藤田 40"76

決勝

1	駿河台 小林-渡辺-蔦谷-清水	40"16
2	東学大 南-長谷川-加藤-矢田	40"21
3	東農大 田村-山縣-青柳-石井	40"52
4	東大 泉-西村-松本-藤田	40"66
5	ウェルネス大 田中-福谷-山田-中村	40"67
6	作新大 檀淵-坂本-前原-土屋	40"76

7 国武大 山崎-工藤-三崎-加藤 41"05

8 上武大 菅野-豊島-稲葉-岩田 41"31

男子 4×400mR**予選(5組 1着+3)**

4組

2着 東大 越村-森本-藤田-箕島 3'18"54

男子 走幅跳

1 吉澤 尚哉 作新大 7m57

2 水嶋 悠太 東学大 7m51

3 二宮 聡史 都文大 7m49

4 秋山 魁杜 国武大 7m41

5 秋山 翔飛 国武大 7m27

6 伊藤 拓磨 国武大 7m25

7 内川 佳祐 東学大 7m14

8 古市 斗武 東経大 7m13

13 深澤 竜太 東大 6m91**17 西村 智宏 東大 6m84****男子 三段跳**

1 齊藤 勇太 作新大 15m75

2 奥村 隆斗 国武大 15m20

3 西内 太郎 平国大 15m09

4 窪田 章吾 東学大 14m95

5 丹生谷 薫 東経大 14m83

6 伴 拓郎 聖学大 14m72

7 佐藤 泰隆 国武大 14m72

8 吉田 侑弥 東大 14m68**9 木下 秀明 東大 14m44****男子 走高跳**

1 小森 翔太 宇都大 2m09

2 小林 秀輔 埼大 2m06

3 鈴木 海平 東経大 2m03

4 杉本 丞 立大 2m00

5 高良 留佳 国武大 2m00

5 池田 直貴 国武大 2m00

5 小林 拓己 東工大 2m00

5 枝 裕二 神大 2m00

福永 大輔 東大 NM**男子 棒高跳**

1 篠塚 祥喜 清和大 5m00

2 上原 響 関学大 4m90

3 高橋 一斗 清和大 4m70

3 高須 莉喜 横国大 4m70

5 三宅 功朔 東大 4m70

6 味方 飛翔 清和大 4m50

7 松下 周平 東大 4m50

8 石川 翔太 国武大 4m40

男子 砲丸投

1 石井 光一 ウェルネス大 15m39

2 服部 晃己 国武大 14m50

3 伊藤 峻真 国武大 13m50

4 戸辺 慎也 国武大 13m20

5 小西 風生 駿河台 13m19

6 栗本 恭宏 東学大 13m01

7 遠藤 誠也 文教大 12m84

8 船越 龍馬 ウェルネス大 12m72

21 奥村 俊樹 東大 10m83**男子 円盤投**

1 宮入 伸豪 東学大 45m40

2 矢口 幸平 埼大 41m53

3 渡邊 翼 国武大 40m89

4 船越 龍馬 ウェルネス大 40m82

5 品田 功稀 芝工大 40m41

6 熊倉 克将 国武大 39m73

7 小畑 裕人 国武大 39m49

8 本木 一成 関学大 37m66

18 土井 雅人 東大 33m75**男子ハンマー投**

1 末谷 裕樹 国武大 58m33

2	平田 勝也	国武大	53m39
3	高野 諒也	国武大	52m41
4	佐藤 優太	平国大	52m28
5	栄野比 ホセ	上武大	51m60
6	石島 和弥	上武大	49m36
7	坂下 晃太郎	日工大	47m85
8	小野 晋司	清和大	47m65
<hr/>			
15	鍵本 直人	東大	39m11

男子十種競技

1	柏倉 飛鳥	東学大	7038
2	武本 泰漢	国武大	7029
3	稲葉 礼史	国武大	6916
4	安栖 遼太郎	国武大	6589
5	富田 巧哉	東学大	6058
6	久保 敬寛	東学大	6016
7	中山 雄太	埼玉大	5884
8	佐藤 智治	千葉大	5873

10 加来 宗一郎 東大 5757

100m	11"28(-0.2)	799
走幅跳	6m61(+1.7)	723
砲丸投	8m37	388
走高跳	1m75	585
400m	51"51	746
110mH	15"79(-0.7)	757
円盤投	18m34	241
棒高跳	3m30	431
やり投	37m41	405
1500m	4'39"69	682

女子 800m

予選(4組 3着+4)

3組		
5着	高石 涼香	2'13"93

準決勝(2組 3着+2)

2組		
6着	高石 涼香	2'14"66

女子 400mH

予選(5組 2着+6)

1組		
4着	坪浦 諒子	1'01"95

準決勝(2組 3着+2)

2組		
7着	坪浦 諒子	1'02"35

男子 3部

男子 100m

決勝(-0.4)

6着	竹井 尚也	11"07
----	-------	-------

男子 200m

決勝(+1.9)

4着	小西 慶治	21"93
----	-------	-------

男子 400m

決勝

1着	小西 慶治	49"13
----	-------	-------

男子棒高跳

3着	上野 隆治	4m40
----	-------	------

5. 主務より

関東インカレ OBOG 紹介

5/19～5/22 に日産スタジアムで行われました関東インカレに際し、応援に駆けつけてくださった OB・OG の方のご氏名をご卒業年順に報告いたします。(敬称略)

S40 年卒 渡部一之

S42 年卒 林義之

S43 年卒 杉野信雄

S51年卒 田上静之
 S54年卒 一色聡
 S54年卒 中谷敬二
 S54年卒 早道信宏
 S57年卒 石村達清
 S58年卒 浅野浩二
 S58年卒 八田秀雄
 S61年卒 大谷薫
 S61年卒 成家秀樹
 S61年卒 藤村陽
 S63年卒 井上裕司
 S63年卒 寺田秋夫
 H3年卒 小野満
 H3年卒 馬場勝也
 H4年卒 福島敬司
 H7年卒 難波聡
 H8年卒 伊藤亮治
 H11年卒 明石頭
 H13年卒 新妻拓弥
 H15年卒 橋本武
 H19年卒 小野剛志
 H19年卒 黒澤徹也
 H20年卒 持永新
 H21年卒 金尾太郎
 H21年卒 菅野雄大
 H21年卒 田中裕一郎
 H22年卒 石川恭平
 H23年卒 近藤堯之
 H23年卒 園部竜也
 H23年卒 西田昂広
 H23年卒 早川晃司
 H23年卒 渡邊拓也
 H24年卒 廣瀬彬
 H24年卒 山田竜也
 H25年卒 大内田弘太朗
 H25年卒 川端紘介
 H25年卒 佐々木駿
 H25年卒 瀧川朗

H25年卒 玉谷謙治
 H26年卒 大久保翔平
 H26年卒 小野田実真
 H26年卒 杉本南
 H26年卒 高森一
 H26年卒 原慎一郎
 H26年卒 堀田樹生
 H26年卒 増田結心
 H26年卒 松野智成
 H26年卒 松原洸也
 H26年卒 吉岡基
 H27年卒 今須宏美
 H27年卒 上野隆治
 H27年卒 工藤健太
 H27年卒 後藤拓矢
 H27年卒 富岡真悟
 H27年卒 中島美咲
 H27年卒 花岡さくら
 H27年卒 原知明
 H27年卒 松本大瑚
 H27年卒 丸野幹人
 H27年卒 山田銀河
 H27年卒 横田絢
 H28年卒 安藤和記
 H28年卒 飯島靖成
 H28年卒 伊藤嘉宏
 H28年卒 郡健太
 H28年卒 小坂英智
 H28年卒 小西慶治
 H28年卒 小南直翔
 H28年卒 沢登良馬
 H28年卒 杉山耕平
 H28年卒 鈴木敦士
 H28年卒 千田周平
 H28年卒 舩島大樹
 H28年卒 三浦史也
 H28年卒 宮崎愛里香
 H28年卒 宮原弘季

ご多忙の中応援にお越しく下さいましたこと、現役
部員一同心より御礼申し上げます。